保育･教職実践演習（幼小）　長友・佐内・菅原

授業概要

担当教員の学校現場での経験を踏まえながら､必要に応じて受講者を２または３班に分けてきめ細かく指導していく。教職課程の履修履歴のカルテを基盤に大学で学んだ学習知と教育実習等で得られた教科等の指導力に関する実践知との更なる統合を図り、使命感や責任感、教育的愛情に裏打ちされた実践的指導力を有する教員としての資質の構築とその確認を行う。

授業計画

第 1 回	教職課程の履修履歴のカルテを基にこれまでの学びの様相を振り返り、教師として求められる資質能力が身に付いたか否かを確認し、今後の学習の方途を構築する。
第 2 回	教員として求められている使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項の確認をする。
第 3 回	教員として求められる社会性や対人関係能力に関する事項の確認をする。
第 4 回	児童の理解や学級経営案に関する事項の確認をする。
第 5 回	子どもの特性や心身の状況を把握した上で、集団の育成を目指した学習経営案の作成を行う。
第 6 回	小学校の授業を参観をする。教員に求められる教科内容等の指導力を学ぶ。 ※学外活動（市内小学校）
第 7 回	授業設計からその実践に至るまでの実践的指導力の様相を整理する。
第 8 回	教科内容等に関する指導案を作成する。グループで討論し、作成。①
第 9 回	模擬授業①
第 10 回	授業分析を行い、それを基に授業研究を行う。実践的指導力を確認する。①
第 11 回	教科内容等に関する指導案を作成する。グループで討論し、作成。②
第 12 回	模擬授業②
第 13 回	授業分析を行い、それを基に授業研究を行う。実践的指導力を確認する。②
第 14 回	教育講演会　　※外部講師招聘
第 15 回	教員に求められる実践的指導力や教員としての資質能力について確認する。
第 16 回	試験：授業設計からその実践に至るまでの実践的指導力が身に付いたかを確認し、加えて教員として求められている資質能力を確認する。

到達目標

教員としての必要な資質能力の育成を志向し、指導案等の授業づくり（指導計画）からその実践に至るまでの一連の力量、つまり実践的指導力の体得を到達目標とする。

履修上の注意

教職を目指すとの自覚を持って授業に参加すること。原則として遅刻欠席は認めない。

予習・復習

授業内容は，将来教職に就く際に必要な実践的指導力の育成を目的としたものである。そのことを念頭において復習に力を入れること。

評価方法

教職課程の履修履歴のカルテを用いてうかび上がった課題や必要に応じて課す課題への個々の取り組み状況やその理解度（50%）、プレゼンテーションなど授業での取り組み（20%）、試験（30%）で評価する。

テキスト

・教科書名：小学校学習指導要領
・著 者 名：文部科学省
その他は必要に応じて授業内で配布する。

保育・教職実践演習（幼小）　　尾形・山本・石橋

授業概要

将来的に、教育・保育の現場において専門家として十分に対応できる能力を身に付けることが重要である。このような最終目的に沿うために次のことを具体的な狙いとする。そのために現在に至るまでの、教職課程・保育士養成課程の履修やさまざまな活動を通して、教員・保育士として最小限必要な資質能力が習得されているかどうかを各自確認する。このようなチェックを通して、教員・保育士になる上で自分が習得できていない課題や問題点を明確にし、問題点の改善に努めると同時に不足している知識や技能を補いその定着を図ることを目的とする。

授業計画

第 1 回	オリエンテーション
第 2 回	保護者からのクレームの現状
第 3 回	保護者からのクレームへの対応
第 4 回	保護者からのクレーム対応技術としてのロール・プレイングの役割と実践
第 5 回	ロール・プレイングの実践と評価
第 6 回	保育活動における表現としての音楽活動のあり方
第 7 回	保育・教育現場で役立つ手遊び、コード伴奏の復習
第 8 回	保育・教育現場で役立つ手遊び、コード伴奏の演習
第 9 回	伴奏譜の書き方
第 10 回	保育者に必要な傾聴法
第 11 回	保育現場でのストレスケア
第 12 回	アサーションを使った保護者対応
第 13 回	保育者としての自己理解
第 14 回	外部講師による講話
第 15 回	全体のまとめ

到達目標

教育・保育士として求められる資質・能力について次のことを到達目標とする。

1. 使命感や責任感、教育・保育的愛情
2. 社会性や対人関係能力
3. 子ども理解や学級経営
4. 教科・保育内容などの指導力

履修上の注意

1.3 名の教員のそれぞれの専門性に基づいた講義・演習であり、保育・教職実践の目的に関わる重要な内容であるのでしっかりと受講すること。2～5回、6～9回、10～１３回、各４回ずつを３グループに分けてオムニバス方式で受講する。

2.出欠席は実習に準じる扱いとなる。

3.受講の姿勢として、積極的な受講態度で望むこと。

予習・復習

シラバスに基づき次回の内容についてはあらかじめ下調べをしておくこと。

評価方法

レポート提出 50%、受講態度(積極性)50%に基づいて評価する。

テキスト

特には指定しないが、必要に応じてその都度指示する。